

妙国寺寺報

平成十九年八月発行 第六号



「夏の夕焼け」

渡邊 義専

「いやあ、暑かですわね、ほんと。今年は特に・・・」が、檀家さんの家に入る時の決まり文句のようになってきました。しかし、思い起こすと去年もその前も、その前も、「暑かですわね、今年は特に・・・」と毎年言っているような気がしますわね。

さて、この季節になると日も長くなり、夕方になると空には綺麗な夕焼けが生まれます。この夕焼けを見ていると、いつも僕は小学校低学年のある夏の日のことを思い出します。

その日はとても夕焼けが綺麗でした。赤や黄色やオレンジやらピンクがかかったもの、西の空は色とりどりでも美しく、「綺麗だな」と最初は見とれていましたが、ふ



と、見入っているうちに夕焼けが何か、良くない前兆を示しているかのような感覚に陥り、もの凄く不安な気持ちに襲われ、何故か「よくないことがおこってしまう・・・」と感じてしまいました。そして怖くなって泣き出して急いで家に帰りましたが誰もいません。余計に恐ろしくなり、急いで近くに住んでいる伯母の家に泣きながら駆け込み「おばちゃん、おばちゃん！空が真っ赤！変な色してる！おかしいよ！」と

当時ベッドで療養生活を送っていた伯母に助けを求めました。

この伯母は幼少の頃より祖父父母を知らない僕にとって実の祖母のような存在の人で、何か困ったり、両親に怒られたりすると、助けてくれる僕の駆け込み寺でした。

すると伯母は優しく「あれはね、今お盆だから色んな家の亡くなったご先祖様達が帰ってきているんだよ、だからね、空があんなに綺麗な色してるんだよ、あの色はご先祖様達が帰ってきたという証拠なんだよ。」と優しく論してくれました。子ども心ながらその言葉に妙に納得し、安心した僕は泣くのをやめて、夕焼けに向かって一緒に手を合わせました。

残念ながら伯母はもう亡くなってしまいました。今でもあの日のことは強く心の中に残っています。この時期に綺麗な夕焼けを見ると、その小学生だったあの日を、伯母の言葉と共に思い出し、「帰ってきたんだね！おかえりなさい」と心の中でつぶやきながら、あの温かい言葉と共に伯母の笑顔を思い出すのです。

「お盆にまつわる少年時代の思い出」

早起 圭彦

「ボンノチョーチン、トモシタ」と連呼しながら小学生の低学年の頃は姉達と浴衣を着て新しい下駄を履き、近所を何の目的もなく、唯々、ほうずき提灯の光をたよりに歩き回ったものです。

上学年になると遊びの範囲、仲間も広まり、ほうずき提灯も「御用だ！御用だ！」のチャンバラの御用提灯に早がわりする。汗びっしょりも我感せず・・・お盆の時だけは夜遊びも大目にみてもらい、夢中で遊んだ事が今も鮮明に思い出される、何せお盆とくれば新しい下駄、ランニングシャツ（今の「シャツ」）パンツ等を、お盆がくるまで床の間に供えておき、毎日眺めてはお盆の来るのを待ち遠しく感じたものです。

また、お盆が近づけば私の役割や手伝いも増えてくる。先ず、お盆に供えるイゲン葉饅頭のイゲン葉（イゲの葉）採りで、布袋を持って山に採りに行ってた。大きくもなく、小さくもなく、探すのはなかなか難しかった。もう一つは父と山に男竹を切りに行き、墓掃除時に持参する花筒、線香筒づくりという父の手伝いである。

母たちはお盆の料理、精霊団子、イゲン葉饅頭等の盆にまつわる料理づくりに忙しく準備していた事を覚えている。食べられる日のくるのが待ち遠しくも思った。

お墓参りの時は、ほうずき提灯に灯をともし、お供えして帰るわけだが、子ども心にもつたない感じがしたことも思い出される。

毎年八月十六日の夕、妙国寺（初代お上人）では、お上人を中心に三拜はあったと思うが、リヤカに乗る程度に表わらるる材料に精霊船を作り、その船にお盆でお供えした提灯で飾り、果物やお供え物を檀信徒の皆様が持ち寄りお供えし、私達子どもや大人の方々と引張り、お題目を唱えながら大島川までお送りしたことを覚えている。現在は環境の環境汚染の問題で中止されているが。

経済社会、生活環境等がめまぐるしく大きく変化したことは事実であるが、先祖を尊び供養するということは、先祖様があつて現在の私達があるわけです。私達は各々の先祖様に生かされているということを決して忘れてはならないという事を少年時代のお盆の思い出を通じて七十数年たった現在、つくづく思うものである。

- ◎九月二十三日
秋季彼岸施餓鬼法要
・ 先祖供養
・ 法華和讃奉詠
・ 副任職による高座説教
- ◎八月三十日～九月十四日
副任職高座説教研修
・ 京都山科 大本山本圀寺にて
- ◎十月五日
護法大会「きくち市文化会館」
・ 貸し切りバスにて参加
・ 参加者募集
・ 参加費 三千元

お知らせ

